

研究ノート

朝・日文体論の研究状況とその傾向性について

梁 伍 鎮 著
呉 満 訳

目 次

1. はじめに
2. 朝鮮の文体論研究について
3. 日本の文体論研究について
4. 文体論研究の傾向性について
5. おわりに

1. はじめに

本稿で述べようとする内容は、研究論文というよりは、数年間、中国で朝鮮語文体論を学んだ筆者が数ヶ月間にわたる日本での研修期間中に文体論研究の実態を考察しながら感じたことを整理し、紹介したものといった方がよいと思う。

現代文体論は、早くも今世紀初めに西欧で生まれ、その後、数十年を経た50年代に初めて朝鮮に伝えられた。中国では、それよりかなり遅れて最近に至ってようやく文体論の理論が受容されるようになった。したがって、中国の学界では、文体論に対する研究はいまだ不十分な状況であり、また、これに関する参考資料を求めることは非常に困難なことである。

それに比べ、日本は中国とか朝鮮よりはかなり早く文体論の理論を受け入れ、かつ多くの研究成果を収めている。ある意味では、中国と朝鮮の現代文体論研究は日本の学界から少なからぬ影響を受けているといっても過言ではない。したがって、たとえ短い数ヶ月の期間ではあったが、日本滞在中に文体論の研究実態について考察ができたことは筆者にとっては貴重な機会であったと思う。

さて、日本における文体論研究についての調査結果であるが、学術雑誌では『文体』の題で出版されていたものを発見し、喜んだのもつか

のま、不幸にもその雑誌はかなり以前に廃刊になっていた。日本でもやはり文体論の研究は難しい状況にあるのだな、とやや失望しながらも少し詳しく調べてみた。すると、『文体』なる雑誌は、1938年にスタイルという雑誌社から創刊されたのであるが、“……やがて戦時になって紙の配給がなくなり、スタイルも文体も廃刊になった。”⁽¹⁾ということである。

次は戦後の1947年、やはり同雑誌社で『文体』の復刊を試みたのであるが、2年後の1949年に第4号で休刊となった。小説家大岡昇平氏の話によれば、“大資本の婦人雑誌が復活し……〈スタイル〉がその圧迫の下に潰されてしまったからである”⁽²⁾という。

その次は、時代もかなり下り、日本の高度経済成長期の1977年になるが、平凡社でまた新しく『文体』を創刊し、4人の小説家が同人として編輯を担当した。ところが、これも諸般の事情で1980年に第12号を最後に終刊となった。

しかし、幸いにも現在日本で唯一の文体論雑誌といえる『文体論研究』という研究誌が現存しており、それにまた、400人余りの会員を擁する「日本文体論学会」が健在していることを知るにつけ、多少の慰めを感じることができた。

では、次に朝鮮と日本の文体論研究の実態について述べてみようと思う。

2. 朝鮮の文体論研究について

朝鮮の文体論研究は、朝鮮が南北に分断されて以来、南北双方の文体論に関わる研究者相互の交流が長年にわたり断絶した現況の中でそれぞれ発展してきたので、南北間に少なからぬ差異が生じている。

南半部、即ち大韓民国における文体論研究は、50年代前後に始まったとみるのが妥当である。見当たる資料としては、1950年に発表された「文体についての時代的考察」〈李崇寧〉を挙げることができる。李氏は、文体論を一種の性格学と規定して、個別的な文体の性格を研究するか、または言語の全体的性格を研究するものだ、と述べた。

李氏に次いで、本格的な文体論研究でその後の韓国における文体論研究に大きな影響を及ぼした人は李仁模といえる。彼は、1955年に「文体論の理論的考察」、1956年に「文章形成法と作家の性格」、1957年に「文体論の解明」などを次々に発表し、1960年には、韓国で最初の文体論の著書である『理論と実践、文体論』なる本を出版した。この著書で述べられた内容を概観すると、主に金東仁の『狂火子』と廉想渉の『くつわ』の2作品を比較考察しながら二人の作家の性格的特徴を導出していることを知ることができる。また彼は、文体因子として、作品の構成、文章の形成法、句読法、語句の用法、音相などを分析した。彼、李仁模の文体分析は、作家の性格究明に重きを置いたもので、文体研究の方向を誤った方向に導くおそれがあるとの批判を受けてはいるが、彼の研究方法がその後の韓国における文体研究に多大な影響を及ぼしたことは事実である。

60年代以降の代表的な研究者としては、丘仁煥、崔昌祿、李東熙、朴甲洙などの各氏を挙げることができる。このうち、前の三者は重点の置きどころが各々異なるが、基本的にはそれぞれ文学的文体論の研究を試みているといえる。例えば、丘仁煥氏の「作家と文体」(1960)、「春園に対する文体論的研究」(1967)、「文体論的批評考」(1965)、崔昌祿氏の「古代小説の文体について」(1959)、「韓国詩文体の伝統的要素と現代的要素」(1962)、「作家と新しい文体意識」(1971)、李東熙氏の「開化期小説の文体特性——春園の場合」(1970)、「文体論の作品考——金東仁」(1972)などから知ることができる。また、朴甲洙氏は前三者とは異なり、主に表現の文体論に当たる研究を試みた、例えば、

「現代小説の具象的表現研究」(1973)、「現代小説の色彩語研究」(1974)、「韓国小説文章の品詞的傾向」(1976)などはラング(langue)としての小説文体の表現性を考察したものである。彼の代表著書としては『文体論の理論と実際』(1977)を挙げることができる。

それから、70年代に入り新たに活躍し始めた研究者としては、金相泰、蘇斗永、金亭子などを挙げることができる。金相泰氏は、「李箱の文体研究——上・下」(1972・1973)、「李光洙の文体研究」(1973)、「生動の美学——金裕貞論」(1976)などの論文と『文体の理論と解釈』(1982)なる著書を発表した。彼は、文体論を文学の本質的研究の一方法とみて、作品の文体上の特徴をそれぞれ抽出しては作家の文体を解明しようとした。蘇斗永氏は、「詩的機能の構造文体論的研究」(1975)、「構造文体論の方法——韓龍雲の〈ニムの沈黙〉分析試論」(1976)などを発表し、構造文体論的方法で文学的文体を研究した。金亭子氏は、「詩的文体比較——李陸史と尹東柱の場合」(1979)、「モチーフ構造から見た金廷漢・李周洪小説の文体的特性」(1984)などの論文と、「韓国近代小説の文体論的研究」(1985)の論著から分かるように文体論的批評を志向した文体論研究を試みている。

この外、70年代に数多くの文学的文体論研究が次々に現われたが、古代小説とか詩歌についての文体研究よりは現代小説文体についての研究の方が頻繁に行われている状況である。

一方、語学的文体論研究では、表現と思考の問題とか、国語に及ぼした外国語の影響など、多様な題材が取り扱われている。例えば、鄭炳宇氏の「国語の表現と思考」(1976)、鄭喆氏の「音声の感情表出機能の根拠」(1971)、黄燦鎬氏の「我が国語に及ぼされた英語の影響」(1971)、南豊鉉氏の「国語に及ぼされた中国語因果関係表現法の影響」(1971)などがその類の論文である。

80年代以降は、前述した学者らがそれぞれの記述体系によって引き続き研究成果を収めている他、新たな研究者として黄哲子氏を挙げる

ことができる。黄氏は、「Jesusの談話の文体と解釈」(1985)、「小説の多音声現象、含意と解釈」(1989)などの論文と「現代文体論」(1985)なる著書を出版し、語学及び談話分析という新たな文体研究分野を試図している。

この他にも、金秉喆氏の「開化期翻譯文学の文体」(1983)、金海星氏の「現代詩調文体論」(1983)、金貞九氏の「金素月詩の言語学的研究」(1990)、金完鎮氏の「韓国語文体の発達」(1983)、韓美鮮氏の「文体分析の構造主義的研究」(1986)、尹ソクミン氏の「国語のテキスト言語学的研究試論」(1989)など多様な内容の研究が行われている。次に、北半部、即ち朝鮮民主主義人民共和国ではどうであろうか？北側では、文体論に関する史的研究がまだ整理されている段階ではないが、正式に出版された文体論著書としては、1978年に出版された朴ヨンスン氏の『朝鮮語文体論研究』が嚆矢であろう。しかし、実際は、60年代初めに、すでに金日成総合大学語文学科教材用として「朝鮮語文体論」が出ていたのである。ただし、これは正式の出版物ではなく、プリントした物でもなく、著者名も明らかにしていないところから判断して、学科研究室の集団編集によるものとみられる。その後、60年代に入り文体論に関する研究論文が少なからず発表された。例えば、李グンヨン氏の「文体論の研究対象としての文体」(1961)、韓ジョンデク氏の「現代朝鮮語の機能文体的体系」(1961)、厳ビョンソク氏の「文体論の手法」(1962)、朴チョンテ氏の「文体の平易性と語彙選択」(1964)、金ドンハ氏の「機能文体の一般的特性」(1965)などである。その中で、代表的な視点と研究内容を概観すれば次のごとくである。

まず、文体の概念については、“ある通信的内容を忠実に、効果的に伝達するため、当言語が所有している様々な資料の中から適切な言語手段を選択するにおいて使用する体系、または原則である”と定義している⁽³⁾。また、文体論の研究対象については、“文体の特性や現代語の機能的文体の研究によって、表現したい思想を理路整然と、明確に表現し、情緒意志の上で

効果的に表現するため、文体論的手段や手法、表現色彩、多様な同義的關係などを研究する”⁽⁴⁾と述べている。次いで、文体の機能的類型を会話体と書面体に分け、書面体をまた、芸術文学体、社会政論体、科学著述体、生産技術体、書式事務体などに分類して、その特性を研究し、表現性に関わる様々な手法や手段をも研究している。

70年代から80年代にかけて発表された著書と論文を部分的に取り挙げてみると、北側での文体論研究の脈絡が捉えられると思う。

例えば、韓ジョンデク氏の「我が文化語文体の発展」(1970)、張ウンムク氏の「政論文での比喩法の機能と表現的效果」(1979)、朴ヨンスン氏の「朝鮮語文体論」(1983)、金ソングュ氏の「小説文体の特性についての研究」(1983)、韓ジョンデク氏の「文学芸術言語文体についての研究」(1986)、文ドンギュ氏の「文体の概念とその類型について」(1987)、カンサンホ氏の「朝鮮語口語体研究」(1989)などが挙げられる。

以上、南北を含めた朝鮮の文体論の研究実態を概略的に述べてみた。

3. 日本の文体論研究について

日本における文体論研究は、1935年の波多野完治氏の「文章心理学——日本語の表現価値」の刊行が嚆矢と言えよう。明治時代後期に隆盛を誇った修辞学研究が衰退した後、文章の研究はしばらく沈滞していたが、フランス心理学を基礎にした波多野氏の文体研究が文章に関する新たな関心呼び起こしたのである。

波多野氏は、当時文壇の両雄と呼ばれた谷崎潤一郎と志賀直哉の文章を取り上げ、その文章上の特色を作家の性格に関連づけ、見事に説明したことにより多大な反響をよぶこととなった。例えば、氏の論述は次のごとくである。即ち、谷崎潤一郎の文章は息が長く安定しており、文の構造は複雑で、動詞が目立ち、比喩を多く使っているといった特性を持っているのに対し、志賀直哉の文章は短い文の中に、時として長文が入り込み、文の長短が激しく揺れるとい

うこと。文の構造は単純で名詞が多く、比喩は少ないということである。こうした文章の特性を、波多野氏は具体的な数字で示しつつ、さらにこのような文章上の特色を作家の性格に結びつけた。即ち、谷崎の文章は自分のリズムで文章を書く観念的な性格に由来するにの対し、志賀のそれは事物に即して物事を見る即物的性格によるということである。

一方、日本の文体論研究の代表者の一人として小林英夫氏を挙げられよう。彼は、「芥川龍之介の筆癖」(1936)を皮切りに、次々と文体関係の論文を発表した。また彼は、“文体論は、与えられた作品がなぜ美しいかを説明しようとするもの”と主張し、「文体論の建設」(1943)、「文体論の美学的基礎づけ」などの論著にみられるように、美学的な立場に立つ文体論を打ち立てた。彼の研究方法は、まず、ある作品から直感的に受け取る文体印象を記述する。次に、その作品の文章構造を分析し、文体印象との間に必然の関係を見出す。さらに、その成果を作者の性格、世界観、文芸思想などの上位の因子に関係づけて説明しようとするものである。

小林氏の文体研究は国文学界に大きな影響を与え、50年代から80年代まで、文学的文体論が隆盛を誇るようになった。そして、この期間中に評判になった著書、論文が多数発表された。例えば、寺田透氏の『文体論のためのノート』(1954)は、“文体”に関する解釈を行った論著として本格的な文学的文体論の幕開けとなった。また、江藤淳氏の論文「作家は行動する」(1959)は、“文体”を“人間の行動の軌跡”と定義づけ、戦後派作家の文体を積極的に評価した。また、厚子朗氏の『文体序説』(1967)、磯貝英夫氏の『文学研究と文体論』(1967)などは、文体研究に関する理論や方法を考察した代表的な論著である。古典でも、玉上琢弥、清水好子、石田穰二、野村精一各氏の「源氏物語」に関する文体論的考察とか、安良周康作、永積安明氏などの中世文学に関する文体研究、中村幸彦氏の近世文学の文体論的考察などが相次いだ。

一方、山本忠雄氏を代表とする語学的文体論研究も同じく盛んであった。彼は、『文体論—

一方法と問題—』(1940)を刊行し、文体研究は言語学の一分野であった。あくまでも言語表現の個別的特色を発見、記述することにとどまるべきである、と主張した。そして、“文体”を“一般的な文法形式から逸脱し、独特の機能を果たしている言葉や表現だ”と認定した。山本氏のこうした考え方は国語学界に受け入れられ、語学的な文体論の流れを形成するようになった。したがって、それまで国語学の研究対象から除外されていた“文章”について関心が高まるようになった。例えば、時枝誠記氏は、『日本文法—口語篇』(1950)を刊行し、“文章”を“語”や“文”と並んだ文法論の研究対象とすべきことを提唱した。時枝氏の研究は、文体論とは違って、文章の普遍的な側面を追求することを目的としていたが、ともかく文章に関する研究が言語学の一分野として認められたことは、語学的文体論の盛行へと連なっていたことを意味する。

他方、文体論研究を統計学的手法で試みた代表者として、安本美典氏と樺島忠夫氏を挙げることができる。安本氏は、「〈文章性格学〉への基礎的研究——因子分析法による現代作家の分類——」(1959)なる論文を発表した。そこでは現代作家100人の文章が取り上げられ、名詞、漢字、人格語、色彩語、声喩、直喩、句読点、会話文という一定の項目のもとに、その使用例が調査され、8つのタイプに分類された。彼の研究は、統計学的手法の導入によって、それまで個別的にしか扱われなかった作家の文章を機械的に大量に処理し、いわば現代作家全般にわたる文体地図ともいうべきものを作成したのである。樺島忠夫氏も安本氏とほぼ同時期に統計学を援用して語学的な文体論研究を始めた。そして、『文体の科学』(寿岳章子氏との共著)(1965)では、安本氏と同じく現代作家100人の文体を統計的に記述したが、安本氏が一人の作家について代表的な一作品を取り上げ、現代作家全体における位置づけに重点を置いたのに対し、樺島氏は一人の作家について、いくつかの作品を取り上げ、それらの作品の文章特性によって作家の文体を追及しようとした。

日本の文体論研究は、1961年、「日本文体論協会」(1989年に「日本文体論学会」と改称)が設立されてから、文学と語学の架け橋になる分野として、新たな発展を展開するようになった。

さきの「日本文体論学会」は、成立以来、すでに60回以上の全国的な研究会を催した。また、1962年10月に機関誌『文体論研究』が発刊されて以来、今年まで第38号(1992年3月)が刊行され、文体論に関した幅広い研究成果を大量に発表されてきた。特に、この学会が1966年に編纂した『文体論入門』と、1991年に学会創立30周年記念とし編纂した『文体論の世界』は、それまでの文体論研究で収めた成果を集中的に収め、文体論における学界での意見や文体論研究の歴史及び展望を明示している。

以上、南北朝鮮と日本の文体論研究の実態を概括的にみた。次は、その傾向性について若干述べてみようと思う。

4. 文体論研究の傾向性について

まず、朝鮮の文体論研究を考察してみると、韓国では、個人文体の研究と文芸批評を基本とする文学的文体論研究が大きな比重を占めているように見える。もちろん、表現性に関わる語学的文体研究もある程度行われているが、数量的にみても文学的文体論研究の方が圧倒的に多い。すでに前述したように、文学作品の文体を心理学的または性格学的立場から接近しようと試みた李仁模氏の研究が韓国の文体研究に大きな影響を与えたというのもこのような傾向性からみた見解だといえる。

それに比して、共和国では、文体を機能的類型の側面からみて、言語の表現性に関連する問題として取り扱う語学的文体論研究を主とする傾向をみせている。共和国では、文体論に対する定義を“伝えようとする内容を最も表現的に伝達するために言語手段を選択し、利用する原則を研究する科学”という見解が定説である。つまり、文体論とは、“言語の文体論の体系とその作用法則を捜し出し、表現的要求に合うように、思想をよりよく表現できる方法を掘り出

す学問だ”と想定している。したがって、次のようないくつかの内容を基本的研究対象としている。

その1つは、言語行為の類型と文体の区分、そしてこれらの特性に関する問題。

その2は、表現手段または表現手法と文体および表現効果との関係。

その3は、文構造とその構成原理に関する問題。

その4は、言語の表現性を高めるための具体的な方途などである。

その他には、個人文体の特異性に関する問題も研究すべきだと言及しているが、まだそのような研究実績はあまり見当たらない状況である。

日本の文体論研究は、研究が活発に進むにつれて語学的文体論研究と文学的文体論研究の対立が目立つのが1つの特徴だといえよう。それを“文体”そのものに対する考え方から考察すると、語学的文体論では、“文体”というのは形態として現われる作家や作品の文章特性といった、静的で客体的なもの、と述べているが、文学的文体論の観点は、語学的文体論の立場からみるとあまりにも直感的であり、もっとも科学的思考にこだわる語学的文体論によれば、直感に頼るのは信じがたいものでしかないのである。

逆に、文学的文体論の側からみると、常に実証的に発言するのが可能である語学的文体論は、自分たちが主張する“文体”の問題を少しも解明してくれていないように思われるのである。このような対立は60年代から次第に激しくなり、その後の状況をみると、両立場は互いに無関係に、それぞれのやり方で研究を推し進めている。いわゆる分化の方向をたどってきた傾向が見受けられる。

5. おわりに

以上、大変粗雑ではあるが、南北朝鮮と日本の文体論研究の実態を考察した上で、次のような問題点を提示したいと思う。

その1つは、朝鮮の文体論研究において、語学的文体論と文学的文体論に関する体系的理論の確立が早急に行われるべきだということである。

現代文体論は、発生初期から観念的で、主観的な研究を図るパロール(parole)の文体論と、表現的で記述的な研究を要するラング(langue)の文体論に分けられ、それぞれ異なった発展過程をたどってきたのである。

朝鮮の文体論研究は、広範囲にわたって種々の試行が繰り返されているが、語学的側面からの研究が主導的な共和国での研究は、まだ修辞学とか文章類型学の枠から脱しきれない状態であり、文学的研究が優勢を占めながら語学的研究も少なからず行われている韓国でもいまだ体系的な理論の確立は不十分ではないか、と思われる。日本の文体論学界で、語学的文体論と文学的文体論が相互に対立を示しながら、分化の方向へ進むのは、ある意味ではむしろ文体論の研究を深化、活性化させる役割を果たすのではないか、と思う。

その2は、朝鮮と日本の文体論研究の現況から判断して、文体の研究における新しい理論の導入が何よりも差し迫った課題だと思われる。

これまで多大な研究成果を収めている日本の文体論学界をみても、現況は不振を脱し得ない状況にあるのではないかと見受けられる。山口仲美氏の言を借りれば、“<文体>に関する<科学>を目指しての研究が日本で始められてから50年、文体研究は一応の完成をみて、かつての勢いを失ってしまったかに見える。いな、もっと端的に言えば、その存在すら危ぶまれる状況なのだ”⁽⁵⁾ということである。このような現況は、また世界的な研究趨勢にも関連するものと思われる。

例えば、現代文体論の発祥地ともいえるフランスでも、60年代の後半から文体論があまり盛んでなくなったということである。そして、

“文体論はまさに死に瀕している”という言葉が出るようになった。ところが他方では、同じ領域のことをやりながら語学とか記号学または語用学などの新しい分野のものが脚光を浴びている。

日本でも文体に関する研究が隆盛を誇り得た基底には、当時、波多野完治氏が心理学理論を導入し、また小林英夫氏が美学心理理論を導入し、安本美典氏が統計学的方法を援用したことなどによったことが大きかった。

文体に関する研究の新たな理論構築と方法論が今まさに再度問われているのである。

<註>

- (1) 宇野千代著「二つの文体」(『文体』創刊号、平凡社、1977、P.10)
- (2) 大岡昇平著「<文体>の思い出」(『文体』創刊号、平凡社、1977、P.17)
- (3) 李クンヨン著「文体論の研究対象としての文体」(『朝鮮語学』(1)、1961、平壤)
- (4) 韓ジョンヂク著「現代朝鮮語標準語の機能文体的体系」(『朝鮮語学』(2)、1961、平壤)
- (5) 山口仲美著「各国の文体論——回顧と展望・日本」(『文体論の世界』、三省堂、1991、P.126)

《参考文献》

1. 李仁模著『理論と実践、文体論』東華文化社、1960
2. 朴甲洙著『文体論の理論と実際』世運文化社、1979
3. 朴ヨンスン著『朝鮮語文体論研究』、科学百科辞典出版社、1978
4. 文ドンギュ著「文体の概念とその類型について」(『言語論文集』(7)、科学百科辞典出版社、1987)
5. 波多野完治著『文章心理学<新稿>』、大日本図書、1965
6. 日本文体論協会編『文体論入門』、三省堂、1966
7. 吉武好孝著『現代文体論・付文体論史』協同出版、1969
8. 日本文体論学会編『文体論の世界』、三省堂、1991

(1992年12月脱稿)